



春燈

2016
May

5 月号



主宰の句

安立公彦



訃報聞くこころ幾たび冴返る

(悼・上山永晃先生)

梅一輪茶毘のけむりを仰ぐかに

骨ひろふ春寒の箸定まらず

納骨の面影今もあたたかし

友ありけふ天界に去る梅二月

久保田万太郎の向

ふゆしほの音の昨日をわすれよと

『流寓抄』昭和三十三年

「海 窓の下に、手にとる如くみゆ」の前書がある。昭和二十年五月二十四日の東京空襲で、すべてを焼失。十一月鎌倉の材木座に転居。眼前にした海の蒼さと、くり返し語りかけてくる波音に、万太郎師はこころを癒されたのであろうか。それから十年東京での仕事が多忙となり、鎌倉を引き払い湯島に転居。万太郎師の世界を思う存分展開したのだった。

吉澤 恵美子

久保田万太郎の句

ひまはりのたかぐく咲ける憎さかな

『冬三日月』昭和二十七年

前書に「老らくの恋とよ」とある。夏の盛りに太陽に向かい、高々と元気に大輪を咲かす向日葵、生涯女性に憧れた万太郎が若い恋人を見た時、それは眩しく「憎い」とさえ映ったのであろう。当時六十歳の万太郎の老境に向かつての焦りのような、もどかしい胸の内を向日葵の姿を借りて吐露しているようだ。

前書の「とよ」という表現に照れと逃げを感じる。

大文字孝一

燈下集



○ 西川保子

鴨帰り鶴翼の陣崩れたり（倅・上山永畷ん）
鳳凰よいくたび帰雁送りしか（平等院）
八荒や湖のうろくつ佃煮に
受験子のひとりや天を仰ぎぬて
知恵熱の子の目の追へり石鹼玉

○ 佐藤信子

日の差して軒端の梅の香なりけり
春光や春日造りの屋根の千木
初蝶に母の言づてもらひけり
箸墓に卑弥呼眠らす春の雪
引鶴のひとつぢ目指す虚空かな（倅・上山永畷先生）

○ 山内四郎

冬晴や海を隔てし紙の街
耕耘機冬田の中に置きざりに
芋を掘る夫婦らしくて蹲り
菜の花や橋を渡れば隣村
春の雨ふるとしもなくふりにけり

○ 片桐てい女

寒鰯や出世払ひと言ふ未来
くるる解く白息に掌を励まして
春障子閉して女を隠しけり
赤城峰の裾を乱さず春立てり
眠さうな空を叱咤し風車

○ 柴崎富子

分け合ひし一握もなき蜆かな
カーテンを引き戻したり春満月
想ひ出のこもる山の湯遠雪崩
薄氷の形ととのふ外湯かな
終列車見送る影の朧かな

○ 園部路郷

大袈裟に鳥海山瘦せ凜す
鴨撃の百発百中とはいかず
ロータリー車碧天たかく雪を吐く
三度目を卸して雪の底に棲む
塩汁に舌を焼きつつ漁自慢

○ 松橋利雄

二ヶ月の木に風のあり畏友の訃(悼・上山永晃氏五句)
梅東風や昨日に過ぎし四十年
春しぐれ遣影は笑みをかへしけり
点鬼簿に釋滋徳とよ春夕焼
下野に春星ひとつふやしけり

○ 浅木ノエ

節分や赤ちやうちんに集ふ鬼
はじめての母の絵手紙春浅し
鰯口の紐のしめりや梅二月
鳥帰る母の手首にゴムの跡
有線の明日の天気花菜風

○ 藤丸誠旨

春寒やアスクレピオスの杖置かる(悼・上山永晃氏在生)
馬の仔や母より父の血は重し
妻が遺して宝石箱のさくら貝
骨納むほの泣く声や沈丁花
蜷の道あそびやせんとうまれきて

○ 懸林喜代次

滝口寺に隣る祇王寺竹の秋
草摘むや草食男子にあらねども
妻朝寝なせば恙のあるやもと
舩ひ解く十石舟や初つばめ
付添ひの母はシャネラー入学児

○ 豊谷 ゆき江

病床の母に差す日やシクラメン

知恵熱と笑ひとばして春の風邪

疎遠なる隣同士や梅二月

非常食の賞味期限や二月尽

定年の手持無沙汰や春障子

○ 赤岡 茂子

荒川の暮色を曳いて浮寝鳥

聖堂の文朝遣構風光る

街騒の届かぬ聖堂春うらら

万蕾の天を指したる辛夷かな

指先に残る蓬の漂ふ香

○ 後藤 眞由美

煤けたる梁の艶春を待つ

春立つや飛びたちさうな鳩車

玻璃窓のまばゆく午後の初音かな

訃報聞く朝のひかりの雪柳

彼の世よりの言伝てなるやたびら雪(樟・永昇先生)

○ 川崎 真樹子

数式の素数の孤独冴返る

ぬいぐるみの玻璃の目潤む雨水かな

ポニーテールの義足ランナー春を蹴る

修道院は祈りの時間浮かれ猫

孕猫膝にフラメンコダンサー老ゆ

○ 木村 梨花

一人より二人が楽し青き踏む

ひとつづつ鳴らして買ひぬ土鈴雛

山彦の律儀な返事山笑ふ

紫荊尋ねたづねて番外寺

春の夢光源氏の腕の中

○ 溝越 教子

春浅し生八つ橋の食み心地

初午や塗り新しき朱の鳥居

通学の子ら一列に水温む

人知れぬ秘密の場所や土筆摘む

紙風船ついては思ひ募らせり

当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

わがままな雲を映して水温む

切通そよ吹く梅の風に逢ふ

散り切らぬ梅の愁ひも実朝忌

鶯の声明に似て時逝きぬ

花の蒼空の夕映え明日を待つ

○ 吉村さよ子

初耳の亡き親のこと春火鉢

猫柳姉妹よく似る笑ひ声

雨雲の去るや高空花ミモザ

紅梅や先づうちそろふ巫女の鈴

「やぶつき豆」匙よりこぼる茂吉の忌

○ 佐藤博重

らふそくの炎真直に一の午

初午や八海山の薦被り

宝前の干魚の反りや冴返る

梅東風や伏見稲荷の氏子幡

歩道まではみ出してゐる植木市

○ 廣瀬克子

春潮のこの風が好き花時計

あたたかや生くるすべなる鯉の口

風二月夜道に高き猫のこゑ

廃校の小さき裏門草青む

潮風に舞ふ連凧の役者ぶり

○ 大森道生

竜天に野路の高きに鳶の笛

田に水を張りて迎ふるつばくらめ

節くれ立つ農の指もて雛飾る

春耕や目覚めて光る土湿り

自転車を寝かせて休む春野かな

春燈の句

安立 公彦選

句会報絶筆の文字春寒し (倅本多遊子師)

茨城 山崎 刀水

家ごとに屋号ある里黄水仙

ペダル漕ぐ少女の列やかかげるへる

式場を泣かせ閉校卒業歌

一幹の風の榛の木寒明くる

麦踏や遠き落暉に随ふ背

波映ゆる橋の裏がは水温む

川ほとりまたたきぬたるねこやなぎ

うぐひすの初音に目覚む鄙暮し

梅の香に心遊ばす一日かな

梅の香にしばし安らぎ人を待つ

ことごとと登山電車や春の旅

永き日や御守男の子の笛買うて

語部の真砂女を語る花の宿

千葉 田村 初枝

新道の未開通なる鼓草

つきたての草餅指も草色に

大寒の空恐ろしや月浮かす

拘らぬ余生生々冬の虹

九十と一つの若さ山桜

春一番宇宙を探る計報かや

国道の自転車レーン風光る

クランブル交叉点一気に渡り春疾風

母に似し男の子のつくる土の雛

浅春の空テニスボールの音軽く

やはらかき夜空もどるや野焼あと

バス停は寺の山号水温む

浅春や枝の影さす倉の壁

里山の裾にはぢらふ路の臺

兵庫 古川 幸子

東京 佐藤まさ子

福島 物江 康平



余言

安立公彦

箸墓に卑弥呼眠らす春の雪

佐藤 信子

「箸墓」は周知の通り、奈良県桜井市にある日本最古の前方後円墳。墳長二八〇米、後円部の直径一六〇米という大きさである。ここに眠る主は邪馬台国の女王卑弥呼といわれる。森浩一著『古墳』（昭和四十五年刊）の、航空写真に写る箸墓の悠然とした姿は、伝説の卑弥呼さながらだ。この句、口承文学の魁ともいふべき箸墓と卑弥呼を一句に収め、それらをつつむ「春の雪」を背景とする、雄大な構想の作品である。固有名詞二つがみごとに呼応する。

耕耘機冬田の中に置きどりに

山内 四郎

「耕す」、「畑打」はともに春季。今は一面の冬田である。見遣る山々は雪を被き、畦の草々は枯色に沈む。その冬田の中に、一台の耕耘機がひっそりと佇む。それを作者は「置きどりに」と表現する。耕耘機への憐情である。

そういう景は、例えその場に立つても句の対象からは外されよう。しかし作者はその無人の土起こし機に心を寄せ、作者の三月号の句に、〈冬山を交へて眠りを〉がある。ともに四郎俳句の本意ともいふべき情の句である。

梅東風や昨日に過ぎし四十年

松橋 利雄

先月号でも触れたが、上山永晃さんが早春二月十五日に逝かれた。ハイデルベルク留学を終えた永晃さんが、「桃青会」に参加したのは昭和四十八年の五月だった。作者も、先年逝去の小島末汀さんも、私も一緒に桃青会だった。

故人の思い出を追うのは、それが別離の直後であれば、余計に悲しい。今月号にはその悼句が多かった。それぞれに永晃さんへの思いが籠められている。この句、「昨日に過ぎし四十年」は私も全く同じ思いである。

年の豆数へて食みて齢寄せず

和田 幸江

節分の夜の豆撒きは恒例となっている。近隣ともに後期高齢者の家が多い。四、五年前までは幾つかの家から豆打ちの音が聞こえていたのだが、今はわが家のみとなった。当方も声を低くして、しかし勢いをつけて豆を撒く。

この句を見て嬉しくなった。「数へて食みて」の前には

当然豆撒きがある。夫君も一緒だろう。そしてこの句の本意は、「齢寄せず」。鬼を遣らうということ、わが身に迫る加齢を押し止めること。その気概が何ともいい。

高千穂の雲ほぐれゆく建国日

尾野奈津子

建国記念日は二月十一日。戦前は紀元節と言って、この日小学生は講堂に集まり、御真影の前にして、「雲に聳ゆる高千穂の」と、起元節の歌を歌ったものだった。この歌の作詩家高崎正風は明治時代の歌人。旧薩摩藩士。

この句、中七の「雲ほぐれゆく」が適切だ。この七音は戦前を知る人には紀元節の歌を思い出させ、戦後生れの人には秀峰高千穂の峰を連想させる。何よりこの七音には未来への希望がある。建国日の句としては出色の作品だ。

遺されし身に陽炎の墓百基

諸岡 孝子

今年の三月十一日は東日本大震災の五年目に当たる。当日を中にして、新聞やテレビは特集を組んだ。津波で壊滅した一帯の惨状は、回復未だしの地が多く、今更のようにこの大災害の厳しさを再認識するのだった。

この句、作者のお住まいは気仙沼市。災害を諸に経験された地域である。「遺されし身に」は、今在る全ての人の思いだろう。「墓百基」は数の計上ではない。災害に伴う

死者への鎮魂の情である。中七の「陽炎の」が、わずかにこの厳しい現状の救いとなっている。しかしこの国の大災害はこれで終りではないという。公私の備えあるのみ。

庖丁のリズム春立つ日なりけり

久米 憲子

この句を見ていると思いつく景がある。昭和五十五年雑誌「太陽」四月号に、「俳人とその職業」という特集があり、「卯波」の板場で庖丁を手に行っている真砂女の写真が載っている。俎板に置いてある長葱を左手に、莞爾と笑む真砂女の白いエプロン姿は、集中の白眉をなす。

掲出句、「庖丁のリズム」がいい。作者の浮き立つころをみごとに表現している。時は恰も「春立つ日」。こういう愉しみは女流の独壇場であろう。

旧正の孤独ひとしほ子ら異国

呂 秀文

今年の旧暦元旦は二月八日、立春は二月四日。時候としての旧正月は初春に属する。私の子供の頃は、正月とは別に、旧正月を祝う風習が広く残っていたものだった。

作者の住まいは台北。正月が過ぎると、お子さん達は皆自分の家に帰る。当然のこと家の中は元の静謐さに還る。しかし作者の場合、お子さんの住む地は「異国」という。中七の「孤独ひとしほ」が必然性をおびてくる。子と思う親の心は洋の東西（ここでは南北）を問わない。